

## 3

家伝本「紅夷外科宗傳」(1706)ほか  
二部についての考察

田中 祐尾

大阪市立大学医学部

故阿知波五郎氏の近代医史学論考によると、楢林鎮山の「紅夷外科宗傳」(1706)を日本最初の医学関係翻訳書と位置づけ、これに次ぐ西玄哲の「金瘡跌撲療治之書」(1735)と伊良子光顕の「外科訓蒙圖彙」(1769)二書の内容の酷似について実に不思議な現象であると論じている。田中家彌性園文庫には三書が共に遺されており、此処で若干の考察を加えたい。

「紅夷外科宗傳」4冊は筆写本で瘍科、金瘡(外傷)、膏藥、油藥の四部に分かれる。序文に宝永丙戌貝原篤信(益軒)七十有七の記銘あり。外傷の部の冒頭に「金瘡跌撲療治之書」が合綴されている。付図はA4版頁で六段十二面を表装軸にして別に保存している。約二世紀を経ると推定される。尚之とは別に散綴した彩色付図も残されている。「外科訓蒙圖彙」の内容はほぼ同じであるが二冊に短縮され付図ともに木版となっている。この本の出版は文化六年己巳(1809)である。

玄哲と光顕ともに主に金創の部だけを流布させて、これが恰も蘭外科を象徴しているが如き印象を与えたという。結果的に我が国の医師以外の人たちへも、それ以後視覚的に、鮮烈なエキゾティシズムを植え付けることに役立つこととなる。また付図について長年パレの外科書からの引用とされていたものを1990年パレ没後400年祭における論文で、蒲原宏氏はスクルテタスの Armamentarium Chirurgicum など他の外科書からの引用が多いことを指摘された。

彌性園文庫の付図と他館収蔵のものを比べた感想は、着色とかつ細目部分の描写に優れ、当時のプロとしての画家の関与が憶測され素人の模写とは考えにくい。

阿知波氏によるとパレ外科書と鎮山の間には蘭医師たちの介在を無視できないとし、鎮山は菓草薬物を含むあらゆる知識をオランダ人たちから吸収し、かつ複数の蘭書を入手していたことが推測される。油藥膏藥の部にはカタカナによるオランダ語ラテン語ポルトガル語が入り混じって、それから約二百年三四十後にシーボルトが長崎で著した薬品処方集と比べてみると煩雑かつ不明なものが多く、当時の本草学者たちの同効異品への探索の苦労が偲ばれる。オランダ語の固有名詞をオランダ人に質問しても、精々それらしき物の図解を示すぐらいであり、それに似て非なるものを求めて山野を彷徨う苦労といえば、異次元の世界に踏み込むに等しかったと思う。

金瘡跌撲療治之書の序文には「疵ヲ蒙ルニ悪処五ツ有リ大陽之両穴手之脈処兩耳之下両之章門兩股之付根古此五ヶ処ニアタル疵可為大事」などとあり、以下数頁を割いて延々と中国太古の陰陽道の経絡や病理を説き、当時彼がパレ外科の実践に乗り出して積極的にメスを持ったとは到底考えにくい。

ただ一か所「大抵金創ヲ治スルニ先ズ焼酎ヲ手引カチンニ温メ木綿ノ之湯ヲ以テ疵脇ヨリ漸々洗ヨセ疵口ヲ静カニヒタヒタト洗ヒ血ヲ止メ其後血ムラナド能序ケ疵ヲ潔クメ麻糸ニ蠟ヲ引針ニ通シ先ノ疵之中程ヲ一針金ノ針ウケアテ縫疵ノ両方ヲ掌ニテ寄せ糸ヲ結フ時両之合目少高く成程ニシメ置クヘシ……」などとあり、焼酎による金創の洗浄の項目が異彩を放つ。司馬遼太郎もその著書にてかなり興奮気味に当時九州に在った焼酎と西洋外科との出会いを述べている。また皮下筋肉層での縫合方法についてはかなり詳細で、このレベルでの実践的記載が目立ち蘭外科書の翻訳に関して、並外れた才能が披瀝される。

何れにせよ西洋医学の夜明け前、我が国の医師たち、実はこの場合数名の上級通詞たちによるその西洋医学の受容とは、まずその医学書との取り組みについては視覚的直観的な外科領域から始まり、尚且つ現代においても我々日本人の国民性として受け継がれる自分流の修飾模倣へと転じていったことが解る。

そしてその後約200年間、世界の外科は麻酔と消毒を欠いたまま、長い暗黒の夜を歩むこととなる。